

宮座の研究(一)

徳川真理子

はじめに

従来、宮座は主として歴史学、民俗学、文化人類学、経済史学の視点から研究されてきたが、社会学からのアプローチはあまりみられない。

この小論では、まずこれまでの代表的な宮座論を整理・紹介し、つぎに宮座が村落社会の中でどのように形態を変化させてきたかをみた。その場合、宮座を歴史Ⅱ経験的レヴェルではなく、むしろ類型としての宮座の形態およびその移行を考察した。

一、宮座研究の推移

宮座の存在が明確にされ、それについて論じられるようになったのは主として歴史学からの「座」論の展開による。福田徳三氏の「我邦中古商業ノ『座』ニ就テノ雜見」(其一・其二)および柴謙太郎氏の「商事組合として『座』の起源」(第一回・第二回)。続いて中山太郎氏の「座源流考」、三浦周行氏の「座の意義に就きて」・「再び座の意義に就きて」、平泉澄氏の「座管見」・「再び座に就いて卑見を述ぶ」等である。特に三浦氏と平泉氏の「『座』とは何か」についての論争は激しかったようである。

右の論文は、商工業の座についての歴史学的考察であり、「座」の語源および「座」の意義を求めるものであった。しかしその後、中山と平泉両氏は神事の座すなわち宮座に眼を向けていった。

中山氏は「座源流考」においても商工業の座に限定するこ

となく、広義に座の源流を求めている。またその後の視点は社会における宮座にむけられ、「宮座の研究」⁽⁹⁾を著わした。

そこでは、神事の座すなわち宮に存する座とは何かということ、またその組織とその権限、宮座の社会的地位などが扱われている。しかしこの時なされた研究方法は地方史誌を資料としたために、現地調査の部分は開拓されなかった。

中山氏の研究は中川政治・豊田武両氏に踏襲された。かれらは宮座が村落社会においていかなる機能を果たすかという点を追求することによって、従来の歴史学的側面からだけでなく社会的・経済的・文化的な側面からもアプローチしている。中川氏は現地調査を試み、「近畿に於ける宮座の研究と古代村落の社会状態」⁽¹⁰⁾を著わした。また豊田氏は、「神社と村落結合」⁽¹¹⁾および「中世に於ける神社の祭祀組織について」⁽¹²⁾などを著わした。豊田氏はこれらの論文において、古くからの宮座の現象の発達過程を分析したうえで宮座の定義を「祭祀権の独占」とし、宮座が村落生活においても権威を持つことを明らかにした。

昭和六年には肥後和男氏が、総合的な宮座研究書を著わした。肥後氏は『近江に於ける宮座の研究』⁽¹³⁾および『宮座の研究』⁽¹⁴⁾において、宮座を媒介として神社と村落のかかわりを歴史民俗学的方法でおこなった。これらの研究においては、日本独自の文化に多く含まれている要素と宮座の祖型との関係が文化の発達として捉えられている。

肥後氏は、宮座を一座するという現象面に着眼し、それを中心とする立場をとった。つまり「ある神社の氏子が定時臨時に場所を定めて集合し、座席について神を祭る」としたのである。また肥後氏は宮座を二つのタイプに分け、株座と村座とした。

また民俗学からアプローチした大越勝秋氏は『宮座』⁽¹⁵⁾において和泉地方の宮座を総合的に研究した。すなわち郷と村との重層構造で宮座慣行を捉え、山・池の共同利用を関連させて神社以外に寺院の座として寺座を取りあげた。

大越氏と同様、古くから宮座の研究者として知られている原田敏明氏は、「座の封鎖性」⁽¹⁶⁾において、肥後氏の村落社会の発展変化に対応して株座から村座へという展開図式とは逆の立場を説いた。

また原田氏とほぼ同じ立場に立つ高橋統一氏は、文化人類学的アプローチを採り、『東洋大学アジア、アフリカ文化研究所年報』⁽¹⁷⁾および「宮座制覚書」⁽¹⁸⁾を著わした。

われわれはこれまでの宮座研究の系譜をみてきた。次に宮座の概念について考察したい。

二、宮座の概念

神事の座を近世文書を利用して追求しようとした平泉氏⁽¹⁹⁾に対して中山氏は、各地方の史誌を資料として伝承や慣行をと

り入れた。⁽²²⁾

中山氏という宮座とは「その神社の祭儀、及び経営に關し、他の信徒（若しくは氏子）に比較して、特別な権限を有する氏子の組合⁽²³⁾」である。また氏は宮座に共通する制度及び権限を具體的に八ヶ条列挙している。

中山氏の研究の流れを汲み、かれの研究に不足していた調査を行ない、その内容的特徴を十二ヶ条にわたって列挙した中川氏は、「近畿に於ける宮座の研究と古代村落の社会状態⁽²⁴⁾」において、宮座の定義を中山氏と同様とした。また中山氏、中川氏の宮座と商工業の座との關係については、座を一つの特権的同業組合とする。いわゆる商工業の座の定義をとるものであった。⁽²⁵⁾

その後、歴史学から豊田武氏が「中世に於ける神社の祭祀組織について」・『武士団と村落⁽²⁷⁾』・「神社と村落結合⁽²⁸⁾」等を發表した。特に「神社と村落結合」で、宮座を「——神社の祭祀及経営を目的として組織せられた一種の神事組合——」とし、「——宮座は同じ氏神の末裔と信ずる氏人等が外来者に対して祭祀権の独占を主張したところに、はじめて明確な姿をとった⁽³⁰⁾」とした。また『武士団と村落⁽²⁸⁾』において「——同族意識が根幹となっている点、単なる地縁団体とは異なった古代的性格を有するものがある⁽³¹⁾」とし、豊田氏もまた中山氏と同じ立場をとるものである。

赤松俊秀氏は「座について⁽³²⁾」を著わした。そこでは寛治六

年の八瀬里の村民の間に座が組織されており、交衆の座次が定まっている。それに加入している者の義務は、響応という体制ができあがっていた点が指摘されている。⁽³³⁾この点を萩原龍夫氏も評価している。

一九三八年、肥後氏は宮座が商工業の座と同時代の社会現象と捉え、座としての宮座の性格を豊田氏の「——座を一つの特権的同業組合とする——」を妥当としている。⁽³⁵⁾また広範圀にわたる調査研究を通じて「近江に於ける宮座の研究⁽³⁶⁾」で「——座といわれる行事を伴ふ神事組合が宮座である⁽³⁷⁾」とし、更に『宮座の研究⁽³⁸⁾』で「この一座して神を祭ることこそ宮座の発生的な意味であり、やがてそうした行事を行う根拠として氏子の間に一定の組織をみることになり、その組織に対してもやはり座という名称を与えたもの——」と見解を深めた。またかれは近江の事例より、氏子一般に解放された宮座が存在することを明確にし、従来の「宮座とは特別な権限を持つ氏子の組合」という概念に相対した。そこに株座と村座の類型がなされたのである。

かれのこれらの研究を、鈴木栄太郎氏は当時の『帝国大学新聞⁽⁴⁰⁾』に書評している。要約すれば、従来の神社研究（祭神の解明を通じて国家的性格との関連を問題とした）は、国民文化の統一をあらわすものであった。しかし氏の研究は、国民生活の中に現に生きているままの神社がいかなるものかを究明したものであり、日本社会を直接的には村落社会と神社と

の關係に焦点をあて、更に宮座という一つの社会現象を中心に研究されたものである。

同じ頃、堀一郎氏は『民間信仰』⁽⁴¹⁾で、宮座を村落の社会構造とその歴史的構成を背景としながら、そこに同族信仰に根ざす原初的形態とその分化変遷過程の中に位置付けている。

かれは肥後氏と同じ立場に立つものである。⁽⁴²⁾

萩原氏は、『中世祭祀組織の研究』⁽⁴³⁾において、宮座の概念を「宮座は一般に神社の祭祀と経営とを目的に結成された神事組合である」とし、広義では「——村落に見られる独占的封鎖的な神事組織」と規定し、狭義には、中川氏が挙げた十二項目をもつて宮座の条件としている。またかれは「惣村結合と神社(一)」において、近世初期における宮座を体制的に構成している諸要素を八項目挙げている。かれの視点は、中世の祭祀組織の展開の中に宮座を位置付けた。

一方竹田聰洲氏は、近世本位の宮座観である。かれは「近世村落の宮座と講」⁽⁴⁶⁾において「宮座とは神社をめぐる氏子の間で、ある特定の家々だけが独占的に又は輪番的に村の全住戸を代表して神社の祭祀に関し常時特別の重い権利と義務を有する慣習的組織であつて、静態的にも動態的にも村の社会構成と密接な関連を持つ——」としている。

竹田氏や萩原氏は、歴史的事実に基づき、歴史上のある時点における村落の解体・再編成に注目して論を展開した点は同じであるが、竹田氏の場合、一族宮座を宮座の祖型⁽⁴⁷⁾として

いる点が異なっている。

同様に近世の宮座を重視し、幕藩体制下の村落生活における家格の重要性を認める、安藤精一氏は、社会経済史よりアプローチし、宮座を次のように定義している。宮座とは「——宗教特に神社を中心とし、一定の家格にもとづく社会・経済・政治的な特権を有する集団——」である。またこれを三つに類型し、一、庄宮座すなわち、中世の荘園を単位とするもの。二、村宮座すなわち、近世的な村落を単位とするもの。三、複合宮座すなわち、庄宮座・村宮座の複合形態としている。

坪井洋文氏は、「祭りの地域的諸形態——宮座研究の視点——」⁽⁴⁹⁾において、宮座を稲作を行なう儀礼集団と位置付けている。

原田氏は、「——元来村落構成員全てが平等に祭祀に参加していたのが、後に特権的な階層が形成されると共に特権を持つ者によつてのみ座が構成され、祭祀が行なわれてゆく——」⁽⁵⁰⁾とした。従つて、これまでのものとは歴史的な解釈が異なっている。

かれの、村落における宮座の発展段階は、村座から株座へと移行する型を論じているが、追求すれば宮座観の相違に他ならないと思われる。すなわち、高橋氏によれば、「——氏の立場(原田氏を指す、筆者)は、中世から近世への惣村結合に宮座の本質を見ようとする萩原氏とともに、フラットな

——村落の結合に宮座の発生を結びつけるものである。しかし、縦に連なる社会と横に並ぶ社会との質的、文化的な断絶を認める時、宮座は村落構造上の問題となり、平等な *status* にある家関係にもとづく地縁的祭祀組織たる宮座は、後者社会の構造原理の一つとして講組結合、年令階梯制とともに相互に補完し合う部分ということになる。——と。

しかし、池田昭氏⁵²⁾の論文にあるように同族を中心として構成された宮座も存し、竹田氏、萩原氏の見方では説明が困難となるうし、また年令階梯制が存在していても宮座の祭祀と直接関係のないものや、伴わないものについての位置付けがあいまいとなるのではないか。

高橋氏は、三十数年前に肥後氏が行なった滋賀県一帯の宮座がその後どのように崩壊・弛緩・変容したかを調査し、「宮座の社会人類学的調査」⁵³⁾を著わした。その結果、宮座の一般的な移行過程は、株座から村座へとされているが、湖東・湖北の例を取り、断定しきれないとしている。また宮座の本質を柔軟な家連合に求め、株座から村座へという移行が、村落の社会経済||文化条件的条件により相互転換しうるのではないかとしている。

かれの宮座の概念は、「——神社の主たる氏子である当該部落のうちで、一定の性格や家筋や古い家柄の家々だけが宮座を構成し、いわゆる座株とでもいうべき特権的地位身分・権利義務をもつのが株座で、そうでなく氏子たる全戸が宮座を

構成するのが村座である。宮座の宮座らしい要素の一つが株座制である」⁵⁵⁾とし、「——宮座とは、畿内を中心に主に西日本⁵⁶⁾の村落社会にみられる、神社の祭祀組織の一種で、多くは一定の古い家々によつて組織される」とした。

次に法社会学よりアプローチした千葉正士氏⁵⁷⁾の指す宮座は、祭祀組織を三つに類型しその一つとしている。つまり、「第一の基本的類型、——宮座を典型とする「宮座—座員」型、もしくは宮座型・座員型。第二の基本的類型、一般のもので「氏子団—氏子」型、もしくは氏子団型、氏子型。第三の基本的類型、一般には信徒・崇敬者・講員などが形成する集団で、「崇敬者群—崇敬者」型もしくは「崇敬者群型・崇敬者型」としている。この第一の類型は、肥後氏の株座に相当するもので、第二の類型は、村座に相当するものと考ええる。また第三の類型は第一・第二より地域的拘束を受けないもので、個人の信仰だけで信仰集団を形成することが可能であるものを指す。しかし現実の存在形態は、以上三つが連続している⁵⁸⁾ため、捉え方の相違が生じる。

つまり宮座という枠をどこまで広げるかということである。宮座の移行過程において氏子制に移行とするか、村座への移行とするかの相違である。

大越勝秋氏は『宮座』⁵⁹⁾において宮座の概念を、「——封建期農村の神社（明治維新までは神仏混淆）の祭祀、経営、営繕などに当たる特殊な氏子の組織で、神社の氏子が均等に祭

祀にあずかるのではなく、氏子の限られたものだけが、特権的に、封鎖的に祭祀にあずかる慣習的な組織で、これを構成している人々の集団および集会をさしている。⁽⁶⁰⁾——」としている。

以上見てきたように宮座論は錯綜としている。しかしこれらの宮座論は、桜井純子氏が大別しているように、大まかに二つである。その一つは中山氏の宮座論を継承する者、和歌森氏、萩原氏、安藤氏、坪井氏、原田氏等。他の一つは、前者に対する肥後氏の宮座論である。そのため次には中山氏と肥後氏の見解の相違を中心に考察したい。

三、宮座の諸類型

中山氏のいう宮座は具体的に以下の八項目の特徴を含み持つものを指している。⁽⁶²⁾

- 一、宮座は必ず神社を中心として、組織せらるること。
- 二、宮座に属する家筋では、交代に神社の祭儀を司り、その期間中は神主となり、併せて神社維持の任務に当ること。
- 三、宮座の権利は、その家に附属するを原則とするが、養子入賀の場合は、その者一代だけ、権利を停止される事もある。
- 四、宮座の家に生れた男子（又は養子入賀）は、或る年齢

に達する間に、神社に保管してある宮座帳に、姓名を登録して、その資格を明確にすべき手続を執らねばならぬ。

五、宮座の権利ある家の男子でも、他に分家した場合は、その者一代だけ、又は永久に宮座の権利を失ふこともある。

六、新たに宮座に加入せんとする者に対しては、宮座の先規により、神社又は宮座中に、冥伽金を納めさせて許す土地と、これに反して、絶対に許さぬ土地とある。

七、宮座の共有していた田畑に関し、その一家が廃絶したときは、他の座中の者が、耕作の権利を取得するのを通例としていた。

八、宮座の名は一般的に用いられているが、是には、土地により、種々なる異称のあることは言うまでもない。また氏は宮座制度の起源を官国幣社よりも小社に多く存していることより、⁽⁶³⁾「——平安朝頃に工夫発達したもの——」と仮定している。

中川氏は、中山氏と同じ意義を持ち、氏の研究で不足していた調査を行ない宮座を以下の十二項目の特徴を含み持つものとした。⁽⁶⁴⁾

- 一、宮座は必ず神社を中心として組織せらるるものなること。
- 二、宮座に属する家筋では交代に神社の祭儀を司り其の期

間中は神主となり併せて神社維持の任務に当ること但し多くは一年交代である。

三、宮座には宮座の順序が嚴重にして一老二老三老と称するものありて順次着座す、多くは年齢順若しくは登録⁽⁶⁵⁾順である。

四、宮座の権利は其の家に附属するを原則とする但し養子入聲の場合は其の者一代だけ権利を停止せらるることもある。又金穀の納入によりて直ちに権利を取得することもある。⁽⁶⁶⁾

五、宮座に属する家の権利は貧富官位にかかわらず凡べて平等であること。

六、宮座の家々に生れた男子（又は養子入聲）は或る年齢に達する間に保管してある宮座帳に姓名を登録して其の資格を明確にすべき手續を執らねばならぬこと。⁽⁶⁷⁾

七、宮座に属するものは年齢の如何を問はず登録の順序によりて当座を務むること。但し年齢順に当座を務むることも少くない。

八、宮座の権利ある家の男子でも他に分家したる場合は座入として足洗と称し加入金を納め其の者一代又は永久に宮座の権利を失うこともある。

九、新たに宮座に加入せんとするものに對しては宮座の先規により神社或は宮座中に冥伽金を納めさせて許す土地とこれに反して絶対に許さぬ土地とがある。

十、宮座の家筋にて一年又は一代間中絶の場合は先規により金穀を納入せなければならない。

十一、宮座の共有していた田畑山林に關し其の一家が廢絶したる時は他の座中の者が耕作の権利伐採の権利を取得するのを通例としていた。

十二、宮座の名称は一般的に用いられているが是には土地により種々なる異称のあることは言うまでもない。

例へば宮中間——結衆——明神講——宮講——等の名称があるが之は内容に於て同一であるから宮座の異称に過ぎない。

これらは宮座を、それが持つ特徴から規定しようとした。中山氏や中川氏の定義は、商工業の座の定義に影響されたものである。

従来商工業者の座は、生産販売に關する特権を持った同業者の組合と考えられてきた。宮座もこの商工業者の座と同じ時代から存在しており、何らかの意味で相互に通ずるものがあると考えられる。故に、宮座も商工業者の座と同様、一つの特権組合であるとされるのである。

また平泉氏は、中世における社寺の社会組織上の位置付けを、神社の「座」に求め、「氏子の団体」「座」はやがて自治団体の單位に外ならない——とし、「神社を中心として結合し統合された自治団体が宮座である」とした。⁽⁷⁰⁾

中山氏と肥後氏の宮座の概念規定の相違は、肥後氏の以下

より明らかである。

「——中山氏のいうごとく宮座が特権組合をなすとは限らないのであり、氏子全体がこれを組織していると見られるものが少なくないことから、特権によってこれ（宮座のこと、筆者）を定義することが困難となった⁽⁷⁾」つまり宮座の本質を外面から規定するか、内面からするかによる相違で、前者は中山氏で後者が肥後氏の方法である。

肥後氏は宮座を括弧付きの神事組合と定義し、この括弧に近江の神事にみられる特異性を表わした。

近江の宮座は、中山氏の指すものが全て特権組合とは限らず、村人全体により組織される宮座も少なくない。たとえば野洲町北桜がそれである。このような例は近江以外にも見られるが、村人全員がいずれかの座に属し、座と全く関係のない者は後に他所から新しく転入した者のみという例が多く存在する。その典型は、野洲町大字三上である。また同大字北桜については転入者がないために不明であるが、同大字南桜については、二代目から神事を勤めることが許されるとされている。この点から肥後氏は宮座を特権組合とはせずに、政治的方面からの定義であるとし、それをむしろ人々が集合する、という、いわば社会的方面から見なければならぬとしている。

これについて、豊田氏は中世の文献で、また中山氏は中央の文献を資料として論じたが、肥後氏は現地調査による資料

をもとに論じた。そのため宮座を特権組合と捉えるか、あるいは必ずしも特権組合ではないと捉えるかの相違が生じてきたのである。従って豊田氏が求めた「座」の持つ特権に関する問題が、当時の「座」の一般であるとは必ずしも言えないし、また中山氏が求めたものについても現地の実状を十分把握したものであるとも言えない。従って肥後氏の説が適當であらう。

四、宮座の類型

今日、宮座といわれるものの中にも、明らかに座を形成し、また座の意義を持続しているにもかかわらず、特権組合と言えないものが少なくない。こういった場合、肥後氏は次の二つの方法をとることが可能であるとした。第一の方法は「特権組合たる座のみを純正の宮座として承応し、他はこれに準ずる擬似体として取扱うこと」第二の方法は、「——その行事の内容に注目し、座と称すべき一定の行事を有するものは、すべて認めてこれを宮座としその中に特徴を有するものと然らざるものとを区別する方法⁽⁸⁾」であり、氏はこの第二の方法をとった。また宮座を「——広く神社に於ける一定秩序の下に行なわれる会合の事実たる面に重要性を置くことから、またこの新しき態度をとって村座⁽⁹⁾の存在を主張しなければならなくなつた⁽¹⁰⁾——」としている。

つまり肥後氏はそれまで株座的なもののみを宮座とよび、これとは別に村座が存在するとしていたのに対して、村座の形態を重視した。そこで特権を有するもの⁽⁷⁶⁾「株座」に対して、特権を有しないもの⁽⁷⁷⁾「村座」⁽⁷⁸⁾とし、その上位概念として「宮座」⁽⁷⁹⁾としたのである。また株座と村座は社会の変化に伴って、前者から後者へと移行するとしている。

この株座と村座の区別および、移行過程に対して、高橋氏は次のような疑問を投げかけている。

一、肥後氏の株座と村座の区別のあいまい性に関しては、村座とみなすものには、(1)古くから村座である少数のもの。

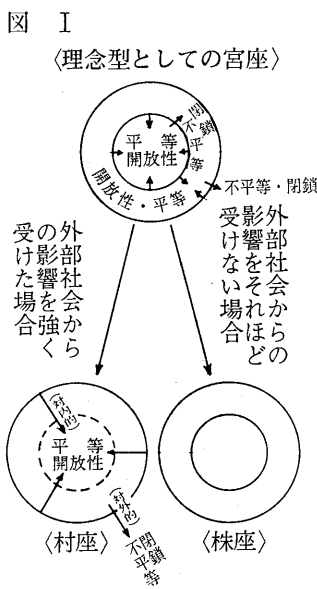
(2)株座から変化した多数のものの二つを認めているため、研究主体である宮座の概念をどのように捉えるかが問題となる。

二、株座から村座へという移行過程のあいまい性は以下に求められると。すなわち「——株座も村座ともに古くから併存するが、大部分は株座であった。それが今日ではその多くが村座に変化した——」である。

これら二点があいまいであるために、明確な分析の方向が出て来ないとも言っている。

高橋氏の宮座の移行過程の捉え方は次の二つである。その一つは、「宮座制覚書」において提出した「理念型としての宮座」の概念はいわゆる株座である」とするもの。二つには、「滋賀県の宮座の現況」・「宮座の社会人類学的調査」において提出された、「株座から村座へ移行することが一般的とさ

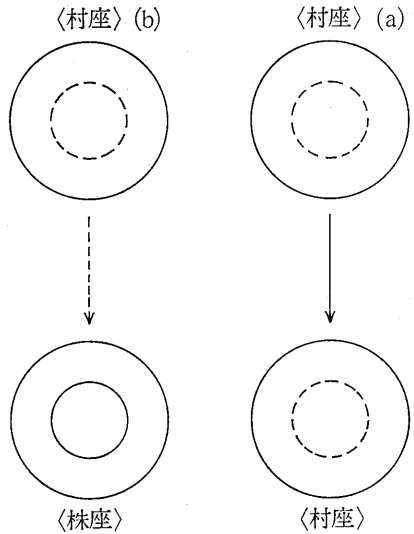
れているが、湖東・湖北の場合を見るとそう断定してしまうのも考えもので——その村落の社会経済・文化的な条件によつて株座にも村座にもなりうる——」というものである。これら高橋氏の説を図示すれば図Ⅰ・Ⅱのようになるであろう。



図Ⅰ・Ⅱの説明は以下のようである。

図Ⅰにおいては、理念型としての宮座は株座を示し、二重同心円である。この二重同心円は氏子の二重の構造、すなわち内円は特定の特権をもつ家々を示し、外円はその他の氏子の枠である。これが外部社会からの影響を強く受けた場合には、二重同心円の内円が特に変化して、村座の形を取る。また外部社会からの影響をそれ程強く受けない場合には、氏子の二重構造はそのままの形を維持してゆくであろう。

図 II



図Ⅱ (a) においては、古くからあるいは元来村座であったタイプで、外部社会からの影響の強弱にかかわらず村座を維持するタイプである。(b)のタイプは、村座であったものが、株座化するタイプで、新たに村落の内部に支配層が出来あがり、その家々を中心に宮座を構成する場合である。ただしこの場合には、条件次第でその可能性が出るのである。それを示す為に点線を用いた。

またかれは図Ⅱの事例より、図Ⅰの株座重視の立場は見合わせている。

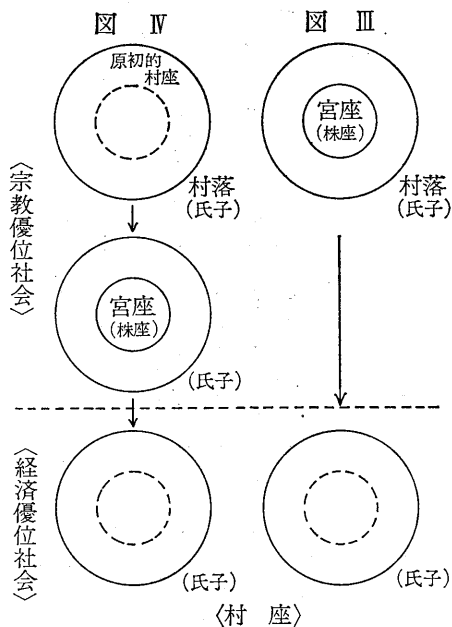
原田氏は、肥後氏の株座・村座の移行過程について以下のように説明し、自己の立場を示している。

宮座の原初的形態を封鎖的な同族祭祀団にでなく、開放的な長老制に求めている。⁽⁸⁰⁾ すなわち「——一般に株という時には、——血縁的か同族的な内容を持ち——座という時には——地域性を必須の条件としたもの——」と。「——株座・村座と並べていつている場合の村座は、特権を持ったものだけでなく、村人の全体が村の行事に参加することの出来る場合である——村の座は、座というものの村人に封鎖的ではなく、開放されたもの——村人は村の行事を中心にして、共同に行動するもので、——座は村人たる資格を示すもの——特権的な座が開放されるといっても、その座の所属する村全体に開放され、村人全体が在来の特権に参与することになる。⁽⁸¹⁾ 座が村全体によって形成されるにしても、村人のうちには、——いろいろの条件で、村の行事から除外され、参加することの出来ないものもある」⁽⁸²⁾と。

また両者の先後関係についてかれは、株座から村座⁽⁸³⁾という移行過程を示した肥後氏に対し、村座から株座へという移行過程を提出した。すなわち「村全体の座がまた特権的な座を形成するとか、特権的な家柄の座ももともと村全体の座から発展したものであるという場合は少なくない」と。

これらは△株座から村座へ▽あるいは△村座から株座へ▽という宮座の移行過程の相異を示している。

ここで以上のことを図示すれば図Ⅲ・Ⅳになるであろう。⁽⁸⁵⁾ 図Ⅲは肥後氏に代表される考え方で、図Ⅳは原田氏に代表



される考え方である。

すなわち肥後氏は、歴史的経過のなかで宮座の移行段階を二段階で捉え、また一方原田氏は三段階で捉えている。つまり宗教的なものが優越する社会に多く存在するのは、株座的なものであり、経済的なものが優越する社会に多く存在するのは、村座的なものである。この株座的なものに示されるのは、宮座の宗教的機能がより強く働く、村落は共同体である。(ただし図Ⅳの場合には、村座的なものを宮座の原初的形態としている)それが外部社会からの影響によって、次第に村座的に変化してゆく。ここに示されるのは、宮座の果す機能

の中で、特に宗教的機能の優越にかわって経済的機能が優越するようになる。村落は共同体であったものから次第にその統合が弱められてゆく。

ここに至るまでの移行過程には段階的に種々の変容形態が認められる。

宮座は集団、仲間である。村落社会内の家々の層によって構成されたもので、層内においては各々平等(図Ⅰ)であるということが根底にある。それによって種々の秩序や組織を具体的に示している。これらの前提となるのは、集団の存在である。またその中核にあるのは世襲の神職で、それを補助する為に何人かがそれを取りまいているのである。

日本の伝統的村落においては、喜多村正氏の言うように、宮座の祭祀組織が形成される必然的な要素は、宗教上の神職者としての資質を備えている者がおらないため、村の公的祭事に宗教カリスマが参与することはまれであることによる。

また宮座の各々の層Ⅱ特に株座に明らかに見られるがⅡの構成員は、半世俗的であり、半神聖的性質を持つ。特に内心円の中核に立つ時、より神へ接近すると解されよう。

ここでいう宮座の構成員と単なる氏子の相違点は次の点にある。

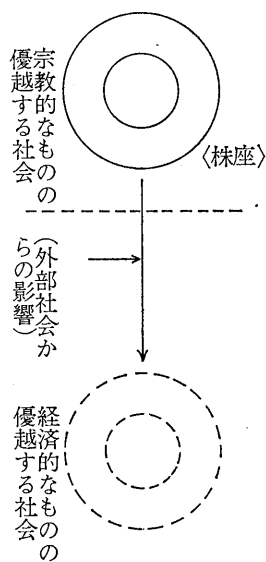
宮座の構成員は、神を祀る必要から村落内から押しあげられる構造となっているが、氏子はすなわち神を祀るために集められた人々である。また氏子は村落に居住する人々が個人

として神との関係を持つ。これに対して、宮座は家を構成の単位として⁽⁸⁷⁾いる。

経済が優越する社会における村落は、宮座構成員の幅が拡大され、ほぼ氏子の広がりと同じくらいの範囲を持つのであるが、これが神へかかわる場合と、明らかに氏子が二重構造を持つ場合（肥後氏によれば村座と株座である）とは、微妙な差がある。前者は千葉氏のいうように系譜神と一定の系譜関係を持つ者により構成され、一定の系譜団だけが守護・支配されるのである。また後者は氏神（鎮守神）と氏子が系譜関係を必要とされず、一定地域に居住する者だけ（地域性）で構成され、氏子区域といわれる一定地域が守護・支配されるのである。従って株座が村座へ解放された時点をもって、氏子制へ移行したとするのは必ずしも妥当とはされない。それは、移行の内容にかかわるからである。つまり宮座が形態的に変化する場合と、質的な変化する場合、また両者が同時に変化する場合とがある。従ってそれをどのレヴェルから、どう見るかによって異なるタイプとなるのである。

図Ⅲ・Ⅳの関連として図Ⅴを考察した。すなわち株座的であるものが、形態的にも内容（質的）的にも変質してしまうタイプである。図Ⅲ・Ⅳにおいては、形態的には株座から村座へと変容してゆき、質的にも特別な祭祀の権利を持つ者のみによる祭祀組織から、その権利を拡大する祭祀組織へと変容していったが、ここに示す図Ⅴは、外部社会からの激しい

図Ⅴ



影響により、宗教的なるものの優越する社会から経済的なるものの優越する社会へと急激に変容してゆくタイプである。このタイプは結局、内的にも外的（形態的）にも宮座が崩壊してゆくタイプである。

以上見てきたように、宮座の移行過程は次のタイプに分けられる。

(1) 株座的なものが村座的なものへと移行するタイプ、(2) 株座的なものが直接に外部社会からの影響を受けることによって、宮座が内容的（質的）にも形態的にも消滅する形へ移行するタイプおよび株座的なものから、村座的なものへ、またそれから宮座の崩壊の過程にあるものへと展開してゆくタイプである。

図Ⅴの捉え方は、氏子組織と捉えるか、あるいは宮座の変容と捉えるか、については様々な問題をはらんでおり、今後の課題である。

- (1) 福田徳三、「我邦中古商業ノ『座』ニ就テノ雜見」『国民経済雜誌』第十一卷第一号、一九一二。
- (2) 柴謙太郎、「商事組合として『座』の起源」『史学雜誌』第三七卷一号、第二号、一九二六。
- (3) 中山太郎、「座源流考」『日本民俗学』3（復刻版）大和書房、一九七七、一〇〇～一二八ページ（一九一七、歴史地理第二十九卷第三第四号連載）。
- (4) 三浦周行、「座の意義に就きて」『史学雜誌』第二九編第一号、一九一八。
- (5) 三浦周行「再び座の意義に就きて」『史学雜誌』第二九編第二号、一九一八。
- (6) 平泉澄、「座管見」『史学雜誌』第二八編第一二号、一九一七。
- (7) 平泉澄、「再び座に就て鄙見を述ぶ」『史学雜誌』第二九編第二号、一九一八。
- (8) 中山太郎、「宮座の研究」『日本民俗学』1（復刻版）大和書房、一九七七、二一〇～二六〇ページ（一九二四年、社会学雜誌第六号）。
- (9) 中川政治、「近畿に於ける宮座の研究と古代村落の社会状態」『国学院雜誌』第三三卷、第八号、第九号、一九二七。
- (10) 豊田武、「神社と村落結合」『日本諸学振興委員会研究報告第四編（歴史学）』一九三八。
- (11) 肥後和男、「近江における宮座の研究」臨川書店、一九四八。
- (12) 豊田武、「中世に於ける神社の祭祀組織について」（上・下）『史学雜誌』第五三編第一〇号・一一号。
- (13) 肥後和男、「宮座の研究」弘文堂、一九五一。
- (14) 肥後和男、前掲書、一九五一、一四四ページ。
- (15) 肥後和男、前掲書、一九五一、四二ページおよび一九四八、一八～五七ページ。
- (16) 大越勝秋、「宮座―和泉地方における総合的研究―」大明堂、一九七五。
- (17) 原田敏明、「座の封鎖性」『社会と伝承』第九卷第一号、一九六五。
- (18) 原田敏明、前掲書、一九六五、二六ページ。
- (19) 高橋統一、「滋賀県の宮座の現況―社会人類学的予備調査―」『東洋大学アジア・アフリカ文化研究年報』一九六九。
- (20) 高橋統一、「宮座制寛書」『民族学からみた日本』河出書房新社、一九七〇b。
- (21) 平泉澄、「中世に於ける社寺と社会との関係」、至文堂、一九二五。
- (22) 中山太郎、「日本民俗学』1（復刻版）『宮座の研究』大和書房、一九七七、二一〇～二六〇ページ（一九二四年、社会学雜誌第六号）。
- (23) 中山太郎、前掲書、一九七七、二一六ページ。
- (24) 中川政治、「近畿に於ける宮座の研究と古代村落の社会状態」『国学院雜誌』第三三卷第八号、第九号、一九二七。
- (25) 中川政治、前掲書、一九二七、第九号、六一～六三ページ。
- (26) 商工業の座では、生産販売に関する特権を持つ同業者の組合とされている。
- (27) 豊田武、前掲書、註(12)。
- (28) 豊田武、「武士団と村落」日本歴史叢書1、吉川弘文館、一九六三。

(29) 豊田武、「神社と村落結合」『日本諸学振興委員会研究報告 第四編（歴史学）』一九三八。

(30) 豊田武、前掲書、一九三八、一一七ページ。

(31) 豊田武、前掲書、一九六三、一一六～一三三ページ。

(32) 赤松俊秀、「座について」『史林』第三七巻第一号、一九五

四、

(33) 赤松俊秀、前掲書、一九五四、一一～一三ページ。

青蓮院白水蔵の聖教裏文書より。

(34) 萩原龍夫、「近世初期における宮座の再編成」『日本歴史』

第一八五号、一九六三、一九ページ。

(35) 肥後和男、前掲書、一九五一、二二ページ。

(36) 肥後和男、前掲書、一九四八。

(37) 肥後和男、前掲書、一九四八、一六ページ。

(38) 肥後和男、前掲書、一九五一。

(39) 肥後和男、前掲書、一九五一、三六ページ。

(40) 鈴木栄太郎、「宮座について」『鈴木栄太郎著作集Ⅳ』未来

社、一九七一、二一三～二一七ページ（一九八九、『帝国大学

新聞』八七二号）。

(41) 堀一郎、『民間信仰』岩波全書、一九五一、一六七～一八四

ページ。

(42) 堀一郎、前掲書、一九五一、一八〇ページ。

(43) 萩原龍夫、『中世祭祀組織の研究』吉川広文館、一九六二、

一九〇～二三〇ページ。

(44) 萩原龍夫、「惣村結合と神社（一）歴史学と民俗学との交流

の場としての宮座研究」『地方史研究四九』第一巻第一号、

一九六一、二四ページ。

(45) 萩原龍夫、前掲書、一九六一、二五～二八ページ。

八項目とは、第一は共同体的諸規制。用水や共有山林の利用をめぐって諸規制が設けられ、これが宮座の構成に大きな影響を及ぼしている。

第二には農民の階層の問題

第三には同族結合の問題

第四には年令階梯の問題

第五に祭儀の実修の問題

第六は斎田の問題

第七は神仏混淆の問題

第八は一座性と封鎖性との問題である。

また萩原氏は、『地方史研究58』第一二巻四号、一九六二、に

おいて具体的に前述の八項目を検討された。

(46) 竹田聴洲「近世村落の宮座と講」『日本宗教史講座』第三巻

三一書房、一九五九、一三九～二一一ページ。

(47) 竹田聴洲「Ⅱ単教同族団の場合―岩手県岩手郡御所村大字繋

小字湯沢（現盛岡市繋）―」『村落同族祭祀の研究』吉川弘文

館、一九七七、一六五～一九八ページ。

(48) 安藤精一、「藩社会と庄宮座」『藩社会の研究』宮本又次編

ミネルヴァ、一九六〇、二七七～二七九ページ。

(49) 坪井洋文、「祭りの地域的諸形態―宮座研究の視点―」『日

本祭祀研究集成』第四巻、（近畿篇）名著出版、一九七七、二

六四ページ。

(50) 原田敏明、前掲書、一九六五、二〇～三五ページ。

(51) 高橋統一、「社会人類学」一、ただしにこれについての論文

は入手出来なかったため、喜多村正、「座と宮座仲間」、『社会

伝承研究Ⅲ』所収、社会伝承研究会刊、一九七四、一〇ページ

から再引用。

(52) 池田昭、「宮座の変貌過程（村落構造との関連）——滋賀県野

洲郡守山勝部——『社会と伝承』第九巻第一号、一九六五。

(53) 高橋統一、前掲書、一九七〇b、七七〜九七ページ、一九六

九、一九七〇a参照。

(54) 高橋統一、前掲書、一九六九、五八ページ。

(55) 高橋統一、前掲書、一九六九、四三ページ。

(56) 高橋統一、前掲書、一九七〇b、七七ページ。

(57) 千葉正士、『祭りの法社会学』弘文堂、一九七〇。

(58) 千葉正士、前掲書、一九七〇、三一〜五五ページ。これら三

類型が現存する場合には「相互に連続群をなすものの一部を示

すに他ならない。」としている。（傍点は筆者）

(59) 大越勝秋、「宮座——和泉地方における総合的研究——」一九七五、

大明堂。

(60) 大越勝秋、前掲書、一九七五、一七ページ。

(61) 桜井純子、「宮座論ノート」『社会と伝承研究Ⅱ、宮座の構

造と村落』所収、社会と伝承研究会刊、一九七四、一七ページ。

(62) 中山太郎、前掲書、一九七七、二一六〜二一七ページ。

(63) 中山太郎、前掲書、一九七七、二一三〜二一四ページ。

(64) 中川政治、前掲書、一九二七、六二〜六三ページ。

(65) 滋賀県高島郡朽木村荒川に存在する。筆者の調査による。

(66) 滋賀県野洲郡野洲町南桜に存在する。筆者の調査による。

(67) 滋賀県野洲郡野洲町南桜に存在する。筆者の調査による。

(68) 滋賀県野洲郡野洲町南桜に存在する。筆者の調査による。

(69) 肥後和男、前掲書、一九五一、二二ページ。

(70) 平泉澄、『中世に於ける社寺と社会との関係』至文堂、一九

二六、五四ページ。

実には氏族制度に在り、而して氏族制度と神社とは、共に祖先崇
拝をその基礎として立つ」

(71) 肥後和男、前掲書、一九四八、一〇ページ。

(72) 肥後和男、前掲書、一九五一、二二〜二三ページおよび前掲

書、一九四八、一六ページ。

(73) 肥後和男、前掲書、一九五一、二四ページ。

つまり肥後和男氏のいう△株座▽と△村座▽を示す。

(74) 和歌森太郎、「宮座の解消過程——奥能登の頭屋制を中心とし

て——」『歴史研究と民俗学』弘文堂、一九七一、二九二ページ

および注(1)

(注1) 肥後和男著『宮座の研究』に従えば、「株座」から

「村座」への移行ということである。しかし「村座」という概

念は「座」というものにすでに或る限界をもった特権団体とし

ての本質を認める限り奇異である。村人一般に開放されてどの

家にも均等に祭祀権が当り得る限り、それはもはや「座」とい

うには値いしない——しかし肥後氏の場合は、「座」には神事

につらなる座という意義が重く考えられているので、「村座」

も、村人一般が神事に列座しうる形のものについていわれている——「村座」までも学術語としての「宮座」の概念に含める

べきか否か甚だ問題であろう。——宮座というのは、歴史的に

も経済的にも、政治的にも、その村のうちで拔群の有力者の一

群が主になって自治的に神事の権利義務をもつようなくみに

関してよぶのであって——一般的な頭屋制の成立条件の方が

——宮座制の経過の有無に関せず現われたことだろう。

(75) 肥後和男、前掲書、一九五一、二四ページ、四四ページ。

(76) 肥後和男、前掲書、一九四八、一九ページ。

△株座▽とは、その座に加入し参加し得る資格が、古来一定

の家筋に属するものに限らるゝところである。即かかる家筋に生れたものでなければ座人・座衆たる資格を獲得し得ないのである。従つてそれは極めて階級的な性格を有するものである。

(77) 肥後和男、前掲書、一九四八、一九ページ。

△村座△とは、その氏子たる以上何人もかかる座に出席し得るところのものである。それは氏子としての平等性を強調するものであつて、敢て家格の如何を問はず之に参加することを許すのである。

(78) 高橋統一、前掲書、一九七〇b、七九〜八〇ページ。

(79) 高橋統一、前掲書、一九七〇b、八二ページ。

―宮座の概念の―理念型としては、『株座であつて、当家制るもち、(正式のメンバーは家長及び長男で)年齢階梯によつて組織される、神社の祭祀義礼団体である』と規定したい。―このうちの何れを欠いても、本来のいわば狭義の宮座であるとは言えない―。

(80) 原田敏明「宮座について」『社会と伝承』第六巻第一号、三〜八ページ。

(81) 原田敏明、前掲書、一九六五、二五ページ。

少数家柄の座が村人に開放され、村全体がまたそれ以外のものに対して、座としての封鎖的な性格を持つて来た。

(82) 原田敏明、前掲書、一九六五、二六ページ。

―一時的な在村者でなくとも最近に入村して来たものや村の附き合が出来ないようなものは、村人に間違ひなくとも、昔からの村の行事、ことに神社や仏堂の行事に参加出来ないものが多い。

(83) 肥後和男、前掲書、一九四八、三五〜四六ページ、および四四五〜四四六ページ。特に後の部分を引用する。

明治時代となり、四民平等の思想が盛んとなる―宮座の如き一種の特権的なものは廃止せられ、郷社・村社の名称が示す如く、一層平等化された統一集団全体の祭祀が主となつてきた。―一般特権的存在としての宮座が亡び、却つて村座的なものが盛んとなり、氏子総代の制度ができ、他の議員などと同様に選挙によつてその位置を獲得することになつて、ここに一大変革が行われた。

(84) 原田敏明、前掲書、一九六五、二六ページ。

(85) 原田敏明、前掲書、一九六九、および一九七〇a。

宮座の発生(成立)基盤や原初形態及び変化のプロセスにかかわるので、慎重に扱うべきであるとしている。

(86) 喜多村正、前掲書、一九七四、一四〜一六ページ。

宮座の構成単位を家とするか個人とするかについていろいろいわれるが基本的には家と考える。

肥後和男、前掲書、一九四八、七八〜七九ページ。および鈴木栄太郎、前掲書、一九七二、二九七〜三〇二ページ。

図式をI〜Vまで提出したが、これについては野口隆教授から、多くのアドバイスをいただいた。記して感謝したい。

この小論は、修士論文の一部を加筆修正したものである。

(大学院修士課程)